



真
夜
中
の
地
下
病
棟

あおおに

まよなかちがびょうとう
真夜中の地下病棟

ノプロプス
noprops / 原作

くろだけんじ
黒田研二 / 著

すずらぎ
鈴羅木かりん / イラスト



たけし

南部小学校の五年生。お調子物で臆病でも、誰よりも友達思いのイイヤツ。



ひろし

北部小学校の五年生。小学生とは思えない、洞察力と知識がある。なぞ解きが得意。

卓郎

東部小学校の五年生。頭の回転が早く、決断力と行動力がある。頼れる存在。



美香

東部小学校の五年生。幼なじみの卓郎と、いつも一緒にいる。運動神経バツグン。

怪物

ブルーベリー色の巨人。人間を見ると襲いかかってくる。

ひろしたちは、自分たちが住む街の外れにある洋館

「ジエイルハウス」と、今は廃校になっている

「碧奥小学校」でこの怪物に出会っているが、

どうやって生まれたのか、どこからやって来たのか、

すべてがなぞに包まれている。

「どうやら犬は苦手らしい……？」

ハルナ先生

ひろしが通う北部小学校の教師。

イケメンと、動物などのカワイイ

ものに目がない。生徒たちが多数

失踪し、閉鎖されることになった

碧奥小学校の元・生徒でもある。

タケル

ビション・フリーゼという種類の犬。

大切な人たちを助けるために、青鬼と

勇敢にたたかった。人間の言葉をすべ

て理解しているが、バレると面倒なの

で秘密にしている。お肉が大好き。

ケロさん

ネイチャーガイド。卓郎と美香が

通う東部小学校の課外授業で、ガ

イドをしていたことをきっかけに、

ひろしたちと知り合う。

1 山頂での出来事

雲ひとつない空を見上げながら、お父さんの真似をして深呼吸をくり返す。

山頂の空気は冷たく、鼻のあたりがひんやりした。

「どうだ？ うまいだろう？」

お父さんが笑っている。でも、ぼくにはそのおいしさがまったくわからない。ハンバーグの味がするっていうなら、金魚みたいにいっまでも口をパクパク動かし続けるんだけど。

最初に自己紹介をしておこう。ぼくはタケル。ピシヨン・フリーゼという種類の真っ白でモフモフな犬だ。人間の言葉がなんでもわかっちゃうという特別な力を持っているけれど、そのことは秘密にしている。天才犬などともてはやされて、今の幸せな時間を失うのは絶対にゴメンだ。

「空気はもういいよ。いくら食べたってお腹いっぱいにならないんだからさ」

まるで、こちらの心を読み取ったかのように、たけし君がぼくと同じ感想を口にする。

「みんな、早くバーベキュー広場に行こうよ」

たけし君は大声でそうさげんだが、誰も返事をしない。

卓郎君は展望台に設置された大きな双眼鏡をのぞきこんだまま動かないし、美香ちゃんも夕ンポポの綿毛みたいな形をしたうす紫色の花を興味深そうにながめている。

ふたりの間をあわただしくかけ回っていたのはひろし君だ。なにをしているのかと思ったら、どうやら赤とんぼを追いかけているらしい。

いつもは誰よりも落ち着いているのに、いったんスイッチが入ると、周りのことなどおかまいなしで突拍子もない行動に出ることが多い。たぶん、赤とんぼになにかひかれるところがあったんだらう。

風向きがわずかに変わり、たくさんのテーブルやイスが並んだ広場のほうから、食欲をそそるおいしそうなにおいがただよってきた。



鼻を動かして、においのもとを分析する。カボチャにトウモロコシ……ホタテ……ウインナー……そしてお肉！ ソースがたっぷりかかった焼きそばの香りもした。

口のはしからよだれがこぼれ落ちる。お腹の虫がグウグウとさわぎ始めた。

本当は一目散にかけ出して、食べ物に飛びつきたかったが、それがはしたない行為だということとは百も承知だ。ぼくはしつぽをふりながら、お父さんの顔を見上げた。

ねえ、まだあつちには行かないの？

そう目でうつつたえたけど、お父さんは相変わらず深呼吸を続けている。

ぼくは地面に寝そべり、「さあ、そろそろお昼にしようか」とお父さんがいい出すのを辛抱強く待った。

たけし君はもう少しこの場にとどまるか、それともバーベキュー広場に向かおうか迷っているらしく、お腹をおさえて「うう、うう」とうなりながら、ぼくの周りを落ち着きなく歩き回る。

風が強く吹き、ひとときわおいしそうなにおいがぼくの鼻先をなでた。こんがり焼けた肉の香りに、居ても立つてもいられなくなる。

「もうガマンできないっ！ オレ、先に行くからな！」

たけし君はそうさげふと、広場に向かってわき目もふらずに走り始めた。

あ、ずるい。だったら、ぼくもいつしよに。

お父さんの許しをもらわずに、たけし君のあとを追いかけることを決める。

ぼくが悪いんじゃない。ぼくを誘惑するこのにおいが悪いのだ。お父さんにしかられたってか
まうものか。

今はもう広場のごちそうのことしか考えられ
なかった。

お父さん、ゴメンなさい。はしたないぼくを
お許してください。

そうつぶやき、後ろあしで力強く地面をけろ
うとした、そのときだ。

「みんな、バーベキューの準備ができたよー
っ！」

広場のほうからハルナ先生の声が聞こえた。

「待ってましたーっ！」
走りながらたけし君がジャンプする。



「あ、うわ、おつとつと」

しかし、調子にのつて高く飛びすぎたのか、着地に失敗してバランスを大きくくずした。

「うわあああつ！」

土煙をあげながら前方に二回転して、そのまま勢いよくたおれこむ。

あーあ。大丈夫かな？

たけし君はいつもそうぞうしくて、見ていてあきることがない。

「お、いいにおいだな」

空気を食べていたお父さんが、ようやくこちらの世界にもどってきた。ぼくがいつもやるみた

いに、鼻をひくひく動かしてにつこり笑う。

早く行こうよ。

ぼくはお父さんの笑顔が大好きだ。情けなく垂れ下がった目じりと右のほおにだけできるえくぼを見ているだけで、幸せな気分になれることができる。

早く！ 早く！

足もとをぐるぐるかけ回って、お父さんを急かした。

派手に転んだたけし君はまだ起き上がろうとしない。地面にはいつくばったまま、頭だけを動

かしてきよろきよろしている。

けがでもしたのかと心配になり、ぼくはたけし君のそばにかけ寄った。全身土まみれだが、どうやら痛めたところはなさそうだ。

「転んだときにくつがぬげちやった。片方だけ見当たらないんだけど、どこだ、どこだ？ 今日のために買ってもらったくつなのに。どうしよう？ 見つからなかったら父ちゃんに怒られちゃう」

まったく世話の焼ける……。

少しはなれたところに転がっていたスニーカーをくわえて拾い上げ、たけし君に渡す。

「お。タケル、見つけてくれたのか。サンキュー！」

たけし君はぼつと顔を明るくして、ぼくの頭をぐりぐりとなでた。

「バーベキュー、楽しみなな」

「あたし、こんな景色のいいところでご飯を食べるのって初めてかも」

卓郎君と美香ちゃんがふたり並んで、ぼくたちのほうに近づいてくる。

「おい、たけし。おまえ、そんなところでなにやってるんだ？ バーベキューの準備ができたつてさ。もたもたしてると、おまえの分まで食っちゃうぞ」

卓郎君の言葉を聞いて、たけし君の表情が一変した。素早く立ち上がると、ぬげたくつを手に持ったまま、全速力で走り出す。

「たけし君、気をつけて。昨日の雨でそのあたりはまだぬかるんで——」

お父さんが最後までいい終わらないうちに、たけし君はまた豪快に転倒した。

「うおっ！」

たけし君のさけび声があたりにこだまし、同時に彼のくつが天高くまい上がる。

……やれやれ。もう助けに行くつもりはない。

「あれ？ ひろし君は？」

そういつて、お父さんがあたりを見回す。確かに、ひろし君の姿だけ見当たらない。どこへ行

ったのだろうか？

嗅覚でひろし君を探す。バーベキューのおいしそうな香りがじやましたが、リンドウによく似たひろし君のにおいはすぐにわかった。

バーベキュー広場とは逆の方向へふらふらと歩いていくひろし君を見つける。視線ははるか上空をさまよっていた。どうやら、あきもせず赤とんぼを追いかけているらしい。

ひろし君はひとつのものに夢中になると、とたんに周りのものが見えなくなる。今もそうだっ

た。

赤とんぼのなにかそんなにめずらしいのかよくわからないけれど、それを観察することばかりに夢中になって、立入禁止の看板の向こう側へ足をふみ入れてしまっていた。そのまますすぐ進んだら、先にあるのはがけた。

がけの手前にはロープが張つてあるし、危険をうながす立て看板もたくさん立っている。ふうは気づくはずだが、ひろし君の場合、常識はあまり通用しない。

「ひろし君、その先は危ないよ！ もどつてきなさい！」

お父さんもひろし君の姿に気づいたらしい。めったに聞いたことのない大声を張り上げたが、ひろし君の耳には届かなかつた。いや、届いているのだろうが、すべての意識が赤とんぼに集中してしまっているのだ。

このままだと本当に危険だ。

ぼくはお父さんのそばをはなれ、全速力でひろし君のもとへ向かった。できるかぎりの大声でほえる。近くにいた幼い女の子がぼくにおどろき、「きやつ！」と短い悲鳴をあげるのがわかつた。

おどかしてゴメンなさい。

でも、今は立ち止まって謝るよゆうがない。

自分の身が危険にさらされているなんてこれっぽちも思っていないひろし君は、がけに向かつてためらうことなく進んでいた。

がけまでのきよりはわずか数メートル。運の悪いことに、古くなってちぎれてしまったのか、ひろし君の進む先だけ転落防止用に張られたロープが存在しない。まずい。このままだと本当にがけから落ちてしまうかも。

ぼくは猛スピードで突き進んだが、ひろし君とのきよりはまだ相当はなれている。

ダメだ。間に合いそうにない。

のどが痛くなるくらいほえまくったが、ひろし君がこちらに気づく様子はなかった。

安全柵のわずかな切れ目をすり抜け、ひろし君はがけのすぐ手前まで進んだ。あと一歩ふみ出せば、そこにはもう地面がない。

間に合わない！

絶望に打ちひしがれそうになったその瞬間、黒い影がひろし君の前に現れた。目にもとまらぬ速さで、彼の細いうでをつかむ。そのままぐいと引き寄せ、ひろし君を胸に抱えた。

「おいおい、めがね小僧。気をつけてくれよ」

迷彩柄のタンクトップを身に着けた男性は、そういつてひろし君にほほえんだ。ぼくたちをこのハイキングにさそってくれたネイチャーガイドのクロさんだった。
……よかった。



ぼくはホッと胸をなで下ろしながら、ふたりのそばへ
かけ寄った。

「君、もうちょつとでがけから落ちるところだったんだ
ぞ」

「ああ……すみません」

ひろし君が小さく頭を下げる。とりあえず謝るポーズ
を見せてはいるものの、視線は相変わらず宙をさまよっ
たままだ。まるでこりることなく、今もまだ見失った赤
とんぼを探しているらしい。

「いったい、なににそんなに夢中になってたんだ？」

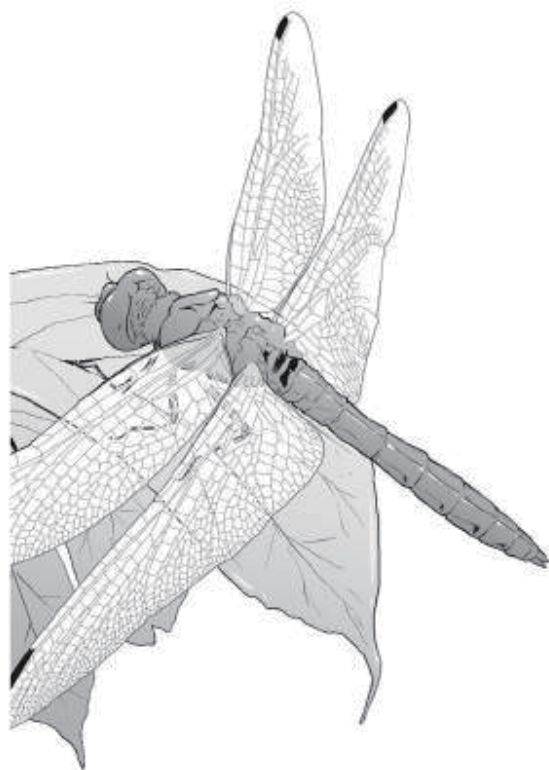
「変種のアキアカネを見つけました」

ひろし君は興奮した口調でいった。

「変種？ どうしてそう思ったんだい？」

クロさんの質問に、ひろし君はほんの少しだけ間を置いて答えた。

「そのアキアカネ……からだか青かったんです」



2 キノコのおばけ

碧奥高原近くの廃校で大冒険をしてから三日後。

碧奥高原よりもさらに奥地にある標高五百メートルの碧奥山へ、ぼくたちはハイキングにやつて来ていた。

企画したのはネイチャーガイドのクロさんだ。ネイチャーガイドというのは山や川、海など自然のあふれる場所で、みんなが安全に楽しく遊べるよう案内をしてくれる人のことらしい。

クロさんとは三日前に知り合った。卓郎君や美香ちゃんの通う東部小学校の課外授業で、生徒たちの面倒をみているところに、ぼくやひろし君が偶然通りかかったのがきっかけだ。

ぼくたちは廃校に閉じこめられ、今思い出してもぞつとする大変な目にあつた。命からがら校舎の外へ逃げ出したぼくたちは、無事クロさんたちに見つけてもらったのだけれど、そのあとが大変だつた。

全員すぐに病院へ運ばれてけががないか診察され、警察にもあれこれ事情聴取を受けて、それだけで丸一日つぶれてしまったのだ。

結局、卓郎君と美香ちゃんは課外授業へ参加することができなかつた。楽しみにしていたオリエンテーリングもキャンプファイヤーも欠席。

気の毒に思つたクロさんは、課外授業の代わりにどうだろう？ といつてふたりを碧奥山のハイキングにさそつた。

もし、よかつたらお友達もいつしよにどうぞ。ほら、この前、キャンプ場で出会つたほかの小学校の友達がいただろう？ みんなもずいぶんとこわい思いをしたみたいだし。イヤなことがあつたら、自然とたわむれるのがイチバンの気分転換になるからね。

そんなわけで、ひろし君とたけし君——そしてうれしいことにぼくにも声がかかり、お父さんもちやつかり便乗して、みんなで碧奥山へやって来たというわけだ。

ぼく専用の食器にお父さんがキャベツとニンジンを入れてくれた。ぼくはそれを一気に平らげる。

……うーん、ピミヨウ。

まずくはないけど、ぼくが本当に食べたいものはこれじゃない。たけし君がかぶりついているあれだ。

「なに、この肉？ やわらかくてジューシーでめちやくちやうまいじゃん」

さつきからたけし君は「うまい、うまい」を連発している。口の周りにはべったりとソースがついていたが、そんなことはおかまいなしだ。ぬかるみで転んで、顔が泥だらけになったときは半泣きだったのに、そんなことはすっかり忘れてしまったのか、幸せそうな表情をうかべて、次から次へと食材を平らげていく。

「それ、先生のおじいさんの家から送ってもらった松阪牛なのよ。超高級なお肉なんだからゆつくり味わって食べてね」

ハルナ先生がいった。先生はちやつかりとクロさんのとなりに座っている。

廃校舎で共に戦った仲間としてハルナ先生もこのハイキングに参加しているが、さそつた当初、先生はあまり乗り気ではなかった。

ゴメンね。二期の準備でいろいろと忙しくて……。

ハルナ先生はずいぶんとつかれた表情をうかべていた。まあ、無理もない。不気味なうわさが絶えない町はずれの洋館——ジェイルハウスで初めてあの怪物と出会ったときは、ぼくも二日ほどご飯がのどを通らなかつた。お父さんはもつと元気がなかつたことを覚えてる。

ぼくにはよくわからないけれど、現実ばなれした出来事に遭遇したとき、大人のほうが子供よりダメージを受ける度合いが大きいのかもしれない。

お父さんがそうだったように、ハルナ先生も元気になるまで、まだもう少し時間がかかるだろう——そう思っていたのだけれど、今回のハイキングがクロさんの企画したものだとなつたとたん、先生の目にキラキラと希望の光がさした。

え？　じゃあ、あのイケメ……じゃなくてネイチャーガイドさんもいつしよなの？　行く、絶対行く。

それまでのつかれきつた表情はどこへやら。先生は急に活き活きとかがやき始めた。なにがあつても——たとえ台風が直撃しても絶対に行くからね。

さすがに台風が直撃したら、ハイキングは無理だと思っただけ。

……え？　二期の準備？　……も、もちろん、忙しいわよ。だけど、あなたたちだけじゃ、ネイチャーガイドさんにいろいろと迷惑をかけてしまうかもしれないでしょう？　だから先生もいつしよについていくことにします。

顔を赤くしながら、ハルナ先生は答えた。実にわかりやすい反応だ。一生懸命、言い訳をしていたけれど、先生がクロさんに特別な感情を抱いていることは誰の目にも明らかだった。

「とんぼを追いかけていてがけから落ちそうになつたんですって？　気をつけてね、ひろし君。あなたはそういうところがあるから」

こんがり焼けたお肉を取り分けながら、ハルナ先生が口を開いた。

先生はさつきからあまり食べず、みんなの世話ばかり焼いている。たぶん、となりの席のクロさんによいところをアピールしたいのだろう。

そういえば、しゃべりかたもなんだかおかしい。不自然にいていねいというか、いつもよりずいぶんと芝居がかって聞こえる。

「なんだよ。赤とんぼなんてべつにめずらしくねえだろ？」

コーラの缶を開けながら、卓郎君がいった。飲み口から白い泡がふき出す。ものすごくおいしそうだが、残念ながらぼくは飲ませてもらえない。いつも使っている白いトレイに入った水をペチャペチャとなめるだけ。

味気ない……いや、そうでもないな。ただの水なのに、いつもよりおいしく感じるのはなぜだろう？

「赤とんぼ……正式にはアキアカネですね」

ひろし君がいい直す。

「どっちだつていいよ、そんなの」

卓郎君はくちびるをとがらせた。

「一匹だけ青いトンぼが混じってしまいましたので、突然変異体かと思ひ、つい夢中になってしまいました」

ソーセージを口に運びながら、ひろし君が答える。食べながらも、あちこちをきよろきよろと見回していた。そのトンぼをまだ探しているのだろう。

「君が見たのは、シオカラトンボじゃないのかな？ シオカラトンボはキレイな水色をしているから」

クロさんがいった。さすがネイチャーガイド。虫についてもくわしいようだ。

「僕も最初はそう思ったのですが、しつぽの先の形状を確認したところ、メスだとわかりました。水色に変化するのはおスだけです。あれはシオカラトンボではありません」

メガネのフレームをおし上げながら、ひろし君は淡々と答えた。

ぼくたちはすっかり慣れてしまっていたが、ひろし君の大人顔負けの博識ぶりにクロさんだけが口をあめぐり開けておどろいている。

「アキアカネのおスと交尾をくり返していましたから、あの青い個体もアキアカネでまちがいないと思ひます」

「なあ、交尾ってなんだ？」

骨付きカルビにかぶりつきながら、たけし君がとなりの美香ちゃんにたずねる。

「イヤだ。変なときかないでもらえる？」

美香ちゃんはほつぺたを赤くして、顔をふせた。

「変なこと？ なにが変なんだよ？」

「おい、おまえはだまって肉だけ食ってる」

卓郎君がたけし君をにらみつける。

「え？ なに？ なんで怒ってるの？ オレ、なにか変なことでもいった？」

本当にわかっていないらしく、たけし君はしきりに首をひねる。

「このあと気をつけてね、ひろし君」

おいしそうなお肉を皿に運びながら、ハルナ先生はいった。クロさんの皿にばかり高級なお肉

がのつているのは、絶対に偶然じゃないだろう。

「クロさんが近くを通りかからなかったら、あなた、がけから落ちて大けがを負っていたかもしれ

れないんだから」

「はい……すみません」

ひろし君にしてはめずらしく、なんの反論もせず素直に頭を下げる。さすがに今回だけは自分

がまちがつっていたと認めざるを得なかったらしい。

「でも、クロさんはあんなところでなにをしていたの？ あそこって立入禁止の場所なんですよ？」

美香ちゃんがたずねる。

「いやあ、申し訳ない。入っちゃダメだったとはわかってたんだけど、どうしてもこれを採りたくってね」

クロさんは大きなキノコを一本、テーブルの上に置いた。テーブルを取り囲んでいた全員から、おどろきの声もれる。

「アカヤマドリタケですね。初めて見ました」
ひろし君は興味深々だ。

「正解」



クロさんが口笛を鳴らした。

「君、虫だけじゃなくて植物にもくわしいのか。もしかしたたら、ネイチャーガイドに向いてるのかもしれないね」

「いえ、それは絶対にありません」

ひろし君は即座に否定した。

「どうして？」

「僕がネイチャーガイドなんてやったら、たぶん気がついたときには全員、がけの下です」

真顔で答える。クロさんはあつけにとられた表情をうかべたあと、声をあげて笑い出した。

「面白いね、君」

「とくに面白いことをいったつもりはありませんが——」

「……ねえ、クロさん。なんなのこれ？」

美香ちゃんがひろし君の言葉をさえぎった。おびえるような視線を目の前のキノコに向ける。

「気味が悪い」

そう思うのも無理はない。そのキノコはぼくの顔よりずっと大きかった。傘の表面はひび割れ、かなりグロテスクだ。

「まるで、キノコのおぼけだな」

そういつて、卓郎君もしかめっ面をうかべた。

「ねえねえ、これって食べられるの？」

美香ちゃんや卓郎君とは対照的に、たけし君は身を乗り出し、キラキラと目をかがやかせている。

「もちろん」

クロさんはうなずきながら、ハルナ先生のほうへ視線を向けた。

「先生の好物がキノコだとひろし君から聞いたので、ぜひ食べてもらいたいなと思って」

「え……私のために？」

ハルナ先生はほつぺたに手を当て、うつとりとした表情をうかべた。

「パスタや味噌汁に入れると絶品なんだ。このあと、僕が調理するから楽しみにしていてほしいな」

なんだ。ハルナ先生だけが一方的にクロさんに夢中になっているのかと思っていたけれど、クロさんのほうもまんざらではないらしい。

「いいねえ、青春だねえ」

お父さんはそうつぶやきながら目を細めた。この表情をうかべるときは、たいていお母さんのことを思い出している。

「クロさんとハルナ先生、熱いねえ。ひゅーひゅーっ！」
たけし君がふたりをひやかした。

「そんなに暑いのですか？ このあたりは風がふいて、とてもすずしいですけど」
ひろし君のすつとぼけたつぶやきを耳にしながら、お父さんがうっかり地面に落としたお肉に飛びつく。

……おいしいっ！

3 お父さんの異変

昼食を存分に楽しんだあと、ぼくたちはクロさんに手引きをしてもらいながら、木に登ったり、ハンモックをつつたり、ボールで遊んだり、レクリエーションを満喫した。

ボールを追いかけて、草原を走り回る。

ふだんはなかなかこんなふうには思いきり走ることなんてできないから、楽しくて仕方ない。ハルナ先生も子供みたいにはしゃいでいた。

お父さんはベンチに座り、ボール遊びに夢中になるぼくたちをにこにこながめている。

ひろし君だけはみんなから少しはなれた場所にこしを落ち着け、熱心に地面をほり返していた。またなにかめずらしい虫でも見つけたにちがいない。

たけし君の投げたボールがお父さんのほうへと転がっていく。ぼくはそれを追いかけた。

勢いよくボールに飛びついたが、大きすぎてぼくにはつかまえることができない。ぼくは一回転して地面にあお向けになった。

青い空が目の前に広がる。

気持ちいい。

自然としつぽが動き、周囲の雑草がわさわさと音を立ててゆれた。

「おい、大丈夫か？」

あお向けに寝転がったまま、いつまでも起き上がらないぼくが心配になったのか、お父さんが上からのぞきこんでくる。

平気、平気。空をながめてただけだよ。

そういつて、ぼくははね起きた。

ボール遊び、楽しいよ。お父さんもいつしよにやらない？

そう提案したが、ぼくの言葉が通じたのかどうか、お父さんは首をすくめただけだった。

……おや？

そのときになって初めて、ぼくはお父さんの様子がおかしいことに気がついた。

顔色^{かおいろ}があまりよくない。額^{ひたい}にあぶら汗^{あせ}をかいているのもわかった。苦しそうに肩^{かた}で呼吸^{こきゅう}を続け^{つづ}ている。

どうしたの？

ぼくはお父さんのあしに、からだをすり寄せた。



「ああ……僕なら大丈夫だ」

ぼくが心配しているのがわかったのだらう。ぼくを抱きかかえると、お父さんは無理やりに笑顔を作って答えた。

お父さんの顔をペロリとなめる。いつもよりしょっぱく、少しだけ苦みも混ざっていた。

昔、病気で苦しそうにしていたお母さんの顔をなめたときも、これと同じ味だったことを思い出す。胸のあたりに小さな虫がはいずっているような——気味の悪いざわつきを感じた。

「少しお腹が痛くてね……ハルナ先生の用意してくれたお肉があまりにもおいしかったから、つい調子にのって食べすぎて——」

お父さんはとちゅうでしゃべるのをやめ、口をおさえた。一気に顔から血の気が引いていくのがわかった。

「ちよつと……トイレに行く。タケルはここで待つてなさい」

お父さんはそういうと、口もとをおさえたまま、力なく立ち上がり、左右によるめきながらパベキュー広場の奥にある建物内へと入っていった。

こんなにも苦しそうなお父さんを見るのは初めてだ。ぼくもあとをついていきたかったが、ここで待つていろといわれたら従うしかない。

ぼくはベンチの前に座り、お父さんがもどってくるのを待つた。

ちよつと待つてば、お父さんはすっかり元気になつてもどつてくるだろう。

ぼくも一度、道ばたに落ちていたものを食べて、お腹が痛くなつたことがあつたけど、食べた

ものをはいたらうそみたいに治なほってしまった。だから、お父とうさんだつて大丈夫だいじょうぶだ。

……。

だけど、三十分さんじつぶん経たつても一時間いちじかん経たつても、お父とうさんは帰かえつてこなかった。

やがて、ボール遊あそびにつかれたみんながぼくの周まわりに集あつまつてきた。

「あれ？ おじさんは？」

「タケル。お父とうさんはどこへ行いつたの？」

トイレだと答こたえても、ぼくの言葉ことばは通つうじない。みんなを連れてトイレに向むかおうかとも考かんがえたが、それでは「ここで待まっている」といったお父とうさんの指し示じを無む視しすることになつてしまふ。

どうしようかと迷まよっていると、建たて物のほうから男おとこの人のあわてふためく声こゑが聞きこえた。

「大変たいへんだ！ トイレで人ひとがたおれてる！」

心しんぞう臓ぞうがドクン、と大おほきな音おとを立ててはね上がる。

動どう揺ようするぼくの横よこをすり抜け、まっすぐ建たて物ものに向むかつたのはクロさんだつた。そのあとをひろし君くんたちが追おいかけていく。

まさか……お父とうさん？

「そんなにふるえなくても大丈夫だいじょうぶ」

その場にひとり残されたぼくを抱え上げてくれたのはハルナ先生だった。

「ほら、しつかりして」

そういつてぼくの頭をなでる。先生のやわらかな指先は、パニック寸前だったぼくを瞬時に落ち着かせる不思議な力を持つていた。

しばらくすると、建物の中からクロさんが出てきた。お父さんを背負っている。ぼくはハルナ先生のうちから飛び降り、お父さんのもとへ走った。

「どうされたんですか？」

ハルナ先生の声が後ろから聞こえてくる。

「くわしいことはわからないけど、症状から考えておそらく食中毒だ。申し訳ない。もしかしたら、僕の採取したキノコの中に毒を持つものが混ざっていたのかもしれない」

「だけど、私はなんともないですし、見たところ、子供たちも元気そうですね……」

「体質や食べた量が関係しているのかもしれない。でも念のため、僕たちも病院で検査を受けたほうがいいだろう。救急車は呼んだ。登山道の入口まで来てくれるそうだ。すぐに向かおう」

お父さん！

クロさんの背中に向かって、ぼくは大声でさげんだ。

「ああ……タケル……」

お父さんはうつすらまぶたを開き、こちらを向いてかすれた声を出した。

「すまないな……心配かけて……」

大丈夫なの、お父さん？

「ああ……ちよつと気持ち悪くなっただけだから……」

お父さんはそう答えると、クロさんのほうに顔の向きを変え、

「もう大丈夫です。ひとりでも歩けますから、下ろしてもらえますか？」

と今にも消え入りそうな声でいった。

「いえ、それはできません。このまま山を下りにします」

即座にクロさんが答える。

「大人ひとりを抱えて山を下りるなんて……そんなことをしたら、あなたもたおれてしまうかも

……」

「僕のことをみくびつてもらっちゃ困ります。これくらいなんてことありませんよ」

クロさんの言葉は力強くてたのしかった。

「さあ、みんな。すぐに山を下りるぞ。ハルナ先生。申し訳ありませんが、ベンチの横に置いて

ある僕のザックを取っていただけますか？」

「あ……はい」

ハルナ先生はいわれたとおり、クロさんの大きな登山バッグ——ザックを手を取った。非常時の食事や救急道具が入っているのだろう。かなり重そうだ。

「……これは私が持つていきます」

自分のザックを背中に、クロさんのザックを前で持ちながら、ハルナ先生はいった。

「無理ですつて。こちらにください」

「クロさん。私のことだつてみくびつてもらつちや困ります。これくらいなんてことはありませんから」

「そうですか。それならお言葉にあまえて、お願いしちやいます」

クロさんは鼻の下をこすつて、照れくさそうに頭を下げた。

「じゃあ、おじさんの荷物は手分けして俺らが持つていくよ」

卓郎君の言葉に、先生はうなずいた。

「ありがとう。じゃあ、よろしくたのむわね」

「任せとけて！」

たけし君が自分の胸をドンとたたたく。強くたたきすぎたのか、三回ほどむせかえった。

「みんな、準備はできた？ 忘れ物はない？ さあ、行くわよ」

小学校の先生らしくみんなにてきばきと指示を出し、ハルナ先生が先頭を歩き出す。ぼくはクロさんの後ろにぴったりとくつつき、お父さんの様子を見守った。

ときどき、苦しそうにせきこむお父さんを見るたびに、胸がきゅつと苦しくなる。

ぼくは非力だ。

クロさんみたいにお父さんを背負うことも、荷物を持つてあげることさえできない。

お父さん、がんばって！

ぼくはただひたすら、お父さんの無事を神様にいのり続けるしかなかった。